

「外泊の石垣」

愛媛県愛南町

外泊は、東隣の中泊からの分家対策として構想され、明治維新頃の約10年前後に移住してできた比較的新しい集落である。中泊集落は元禄13年(1700)、淡路島からきた吉田氏によってつくられたと伝えられているが、幕末頃には人口増加により集落が大家族構成となり、分家・移住の必要性が生じた。ひとまず家屋が出来上がって全戸入居したのは、明治12年頃と言われている。

外泊の土地造成の特徴は、約50戸に対し60～70坪の敷地が配分され、3戸に1区画の共同耕作畑地が隣接し、防風対策のための石垣に囲まれていることである。

集落の規模が約50戸であったのは、当時の生業である漁業との関連が深い。当時の中泊の主業は網元と網子の約50名からなるおもだか網(鰯網)で、外泊には中泊の網元の三男(外泊での網元)を中心に集落が形成された。また、網元の屋敷が唯一の平地に決められた以外は、「くじ引き」によって土地の分配が行われたという。

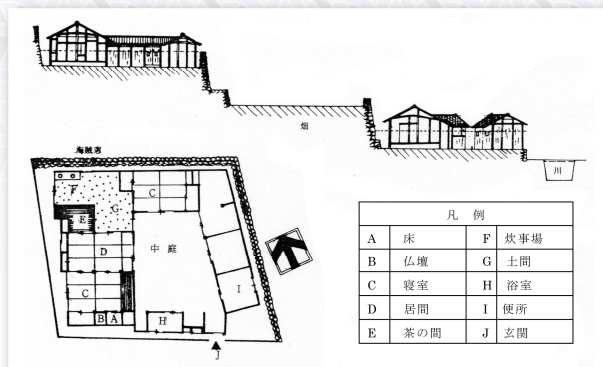
素材は現地の自然石を使い、工法はコンクリートを用いない空積み、積み方はいわゆる野面積み(乱積み)である。石垣の造成は、「手がえ」(手伝いに行って、また手伝い仕返す)という相互扶助の方法により造成され、特別な石工などの職人が手がけたものではなく、唯一、

故吉田七蔵氏が17歳の時に築いたとされる石垣が、「七蔵垣」という名で呼ばれ、作者がはっきりしているだけである。

家屋の配置は、オキ(海)に面した方に炊事場を、ソラ(南の山)に面した方に床の間や座敷を配置している。移住当時は、家族も少なく土間・居間・座敷と一列に並び、南予地方の漁村民家の基本的な配置であったが、その後、家族が増え経済的に安定してくると部屋が増築され、コの字型・口の字型になり中庭が残るようになった。このように、単なる分家対策として一区画を小さくし多くの家屋を押し込むのではなく、当初から集落としての成熟を見通した計画性がうかがえ、外泊集落の特異性をさらに高めている。



昭和 30 年代の集落



敷地断面図及び配置図

【資料】西海町教育委員会
「西海町外泊石垣集落保存調査報告書」(昭和49年度)

みどころ



- 高茂岬：外泊のある西海半島の最南端に位置し、豊後水道に突出する岬。晴れた日には遠く九州が一望でき、特に九州山地へ沈む夕日美しいことで有名。
- 鹿島（宇和海海中公園）：宇和海海中公園に浮かぶ小島。シュノーケリングや水中展望船で熱帯魚やサンゴ礁を観察できる。